

# 第九回「群黎賞」発表

## 第九回「群黎賞」受賞作

森山なつめ「まろやかに融ける」

正賞Ⅱ 賞状および佐佐木幸綱『群黎』

副賞Ⅱ 選者三名寄書き色紙および万年筆

## 第九回「群黎賞」次席

雨雨雨汰「話せたならば」

## 選者賞

各選者より記念品

## 選考委員（選者）

佐佐木定綱、清水あかね、服部崇（前年度心の花賞受賞者）

## 選考経過

- ① 応募総数 四十五編（内、メール三十五編、郵送十編）
- ② 各選者が三点・二点・一点をそれぞれ

五編、計十五編を選び、八月二十四日に一次選考会を開催。二点以上を得た二十五編を予選通過作（下段）とした。通過作の中から各選者が改めて各三編に投票。八月二十九日に最終選考会を開催し、得票のあった候補作八編（○印）につき合議、「群黎賞」および「次席」、三編の「選者賞」を選んだ。

尚、いずれの選考会も Web 会議システム（Zoom）上で行った。

## 予選通過作二十五編（五十音順）

- 穂山順子「月の角度で」
- 佐藤直大「朱肉」
- 口笛浦「燻んだ青」
- 長雄誠一郎「定時制高校」
- 門坂峻「水の季節に」
- 古谷明希歩「横顔」

○南ゆき「森をたずねよ」

吉田まゆみ「春の日」

守乃みさと「金の折り鶴」

河村仁誠「ニライカナイ」

葉月まこ「アマリリス」

○雨雨雨汰「話せたならば」

清水晴架「連れてくる風」

黒乃響子「龍山寺の空」

藤しおり「東風として」

○藤真那智「（無題）」

○野田鮎子「余白をもてあそぶ」

水野芳「光は充ちて」

坊真由美「白いコスモス」

○森山なつめ「まろやかに融ける」

青山哲也「桃色ふぐり」

内山奈津子「青信号無視」

尾崎桜子「きつとコメディー」

山田英夫「刑務所の歌」

○重黒木俊陽「海を束ねて」

# まろやかに融ける ● 森山なつめ

胃のなかのカレーがこなれてきたころに不妊治療のはなし切り出す  
出社まであと五分ある 雨の日はミルク多めのラテに凭れる  
手土産の「ひよ子」デスクに座らせて異動の挨拶ともに聞きをり  
水盤を揺らさぬやうに身支度を整えて行くをんなの職場  
ゆきなやむ春風もあり公園の階段のすみに羽の溜まれる

薄暮れのバス発車して各々の指先に灯るスマホの画面

ま昼間も残業のあと丘上の産婦人科はいつも白くて

ひとりで動く内診台の椅子わたしはサンプルAとなりたり

ぬばたまの眠りに落ちてゐるひとつのつむじの渦をくまが見つむる

駅なかの花屋で買ひし芍薬の二本咲かずにしんと終はりぬ

ごみ捨てに出づれば霧の立ち込めてふたりの住処埋もれてゐる

木漏れ日のしたぶち猫が歩きけりだまし絵めきて午後はずぎゆく

青い風連れてきたやう卓上のペットボトルにネモフィラ揺れて

夫なるひとと生活しはじめてまろやかに融けるわれの輪郭

幼子がママへと駆ける道すぢにシロツメクサのほつぽつと咲く

## 受賞の言葉——森山なつめ

この度は群黎賞に選んでいただき、ありがとうございます。

短歌を始めたのは三年前です。ふとしたことから和歌を好きになり、そこから現代短歌に出会い、自分でもなにか詠んでみようと思い心の花に入会しました。

当時はまだ青森に住んでおり、冬の歌や雪の歌を多く詠んでいたように思います。

この三年間、到底勤勉とはいえないが、月詠を出せない月も多くありましたが、そんな中でも、オンライン歌会や東北歌会の際に温かく迎えていただいたり、また、大分に転居してからは大分歌会で優しく迎えていただいたりと、たくさんの方々を支えられて短歌を続けてくることができました。これまでご指導いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。



話せたならば●雨雨雨

フィラメントぼつりぼつりと山かげに点る小道を施設に向かう  
 面会の制限時間十五分を老母<sup>はは</sup>は「子守歌」聴かせて帰る  
 断食<sup>ラマダン</sup>月を迎えた若きムスリムが百人分のご飯をよそう  
 ひと匙のキャベツの上に肉を乗せ野菜嫌いの口に運びぬ  
 ああ、彼は独りぼつちで三度目の警報ベルを夜更けに鳴らす  
 はじめての月面を踏む人となり夜の廊下をあなたと歩む  
 生きものがひとつもない正門を監視カメラが映す冬来ぬ  
 棚にある喀痰吸引人形に明かりを消して good night と言う  
 此処がまだ終の棲家と思えずに「ウチニカエル」と繰り返す人  
 剥き出しの蛍光灯に照らされて廊下で光るゆばりを拭きぬ  
 アルビノの肌を持ちたる満月が灯りの消えたわが家を照らす  
 もしきみが話せたならば介護士に「ありがとう」って言うのだろうか  
 目のなかに光の蟲を泳がせて真夜中ブラックコーヒーを飲む  
 東向きの居室の地味なカーテンを開ければ明けの明星の見ゆ  
 帰り道にそぼ降る雨がぼくたちの歪んだ世界を道路に写す

## 海を束ねて ● 重黒木俊陽

産卵管もつ蠅螂よどのように生きてもわれは生きのびている

冬の夜の進学塾に停まりいてひかりをこぼす自転車のかご

ニンゲンを演じるみたいな気分だとおまえは言えり上履きはきて

これは月これは太陽と語りてはひとりおまえは泥団子磨く

銀河ゆく機関士の背はおまえに似て曲がりいるらん教科書を閉ず

鳩のこえ波打ちながらながれゆき末は皆みな海へ帰るよ

御崎馬へ雲の行方を語らんとすれどもわれのことば貧しく

馬は馬われはわれなれば岬にて空の青さを分けあいて吸う

一枚の譜面のようにひろげんとおまえのもとへ海を束ねて

帽子をもちかがむつかのま瞳とう水惑星にしじみ蝶すむ

解剖のための眼球はうえを向く天井のうら空がひろがる

座らせるかたちのままに逆さまの理科室の椅子みて過ぎにけり

明日なんか知らなくていいひるがえり地図の真裏の白は輝く

「鳥」と告ぐときの声音の異なれるおまえとわれの目にも夕焼け

規格外品の雲なしちいさきもみなひとつずつ影をもちおり

横顔 ● 古谷明希歩

「好きな人できた」とあなたに告げられて自転車置き場のくちなし落ちる  
晴れたまま降り出した雨を受け止めて色の濃くなる藍のスカート

気付いてた感情ひとつに蓋をして曇りガラスの校舎を歩く

甘ったるく喉にはりつく桃ネクター良いじゃんなんて言いたくなかった

(雨漏りは気付かれないまま) 教室の窓辺に迫る青い紫陽花

消しかすを両手に包んで捨てにゆく後ろ姿はかみさまめいて

胸元にとまる蝶々をくずしまた蘇らせる白い指先

あの人と話すあなたは笑ってたわたしの知らない熱をまもって

とろとろと産毛ひからせ五限目のあなたは波にさらわれてゆく

イヤホンを半分こして聴かされた曲がわたしに見せる正夢

横顔のあなたばかりを知っていて近すぎることは遠すぎることに

差し出した折りたたみ傘友人と自称するには後ろめたいまま

靴擦れはほうってあなたと帰り道知らなければ無いのとおなじ

自意識と共にゆらめく水たまり緞帳のように傘を閉じたら

ためらわずあなたが駆け出す黄信号わたし怖がりなんだよ、またね

無題 ● 藤真那智

あの頃の社宅は六畳ワンルームユニットバスで動物園ビュー

イルカにもジャンプ苦手なやつはいるバックヤードで胃薬を飲む  
岩陰で母を待ち続ける子鹿動かないまま動けなくなる

治療したチンパンジーに思いきりキャベツ投げられ今日は祝杯

お隣はきつと合コン良い香りしそうな女子がシェアするサラダ

合コンの話題には向いてないだろうカニに胆のうがあるのかどうか

同僚と別れてひとりつく帰路は木星ほどの重力がある

地球滅亡の日食べるはずだった天ぷら屋が閉店するらしい

デパートの屋上のメリーゴーランドくらいの速さで命が過ぎる

メス同士つがいになったペンギンがこれが恋だと教えてくれる

国内で最後のラッコに群れる人あすはパンダの前で行列

披露宴の余興で当てたバルーンが独り暮らしの天井を這う

カラフルなランドセル背負う子供らが紺のスーツに集約される

サバンナのライブ中継ユーチューブ窓の外にも同じ咆哮

シャンプーにお湯の温度に洗剤に好みの違うあなたと暮らす

# 選考を終えて

佐佐木定綱×清水あかね×服部崇

## 面積が高さか●佐佐木定綱

第九回群黎賞は森山なつめ「まろやかに融ける」に決まった。

「まろやかに融ける」は不妊治療というテーマが重奏低音のように響き続ける連作である。一首目に不妊治療が提示され、その後の日常詠にもその不安が陰影を濃くし、連作としての完成度を高めている。加えて身体を「水盤を揺らさぬやう」と例えたり、自身の思いをつむじ風に託し「ゆきなやむ春風」と表現したりと、全体の完成度の高さは頭一つ抜けていた。

次席は雨雨雨汰「話せたならば」。こちらは介護施設で働く職業詠が中心の連作。「三度目の警報ベル」が鳴らされたり、廊下の「光るゆばり」を拭いたりと過酷な夜勤の光景などが歌われる。「フィラメント」が灯る通勤の道や、ご飯をよそう同僚の「ムスリム」への視線など鋭い視点の光る歌が多い。良い歌の突き抜けるような衝撃度は抜群だった。

争点となったのは「全体か一首か」という点である。連作としての面積か、一首と

しての高さか。二作を比較する。「まろやかに融ける」は全体の歌の平均値が高く面積が広い。「話せたならば」は強烈な一首があり高さが顕著である。ただ、前者は格別な高さはない。後者は歌の高低差が否めない。相対的に討議した結果今回は面積優位で森山作が群黎賞となった。

選考賞には重黒木俊陽「海を束ねて」を選んだ。学生としての日常をやや内省的な視点で歌う一連である。特筆すべきはその言葉の踏み込みの良さだ。ただの蟬螂ではなく「産卵管もつ蟬螂」、ただの機関士ではなく「銀河ゆく機関士」。「御崎馬」の地名で場所を立ち上げるのもうまい。選考で指摘されたのは「おまえ」の存在。随所で出てくる「おまえ」の輪郭をもう少しはっきりとさせる作りもいかもしれない。

以下、順不同で気になった作品を。

口笛浦「燻んだ青」、家族間の関係の表現が秀逸。情景の歌もよい。トップクラスの作品だった。佐藤直大「朱肉」、変わらずよいユーモア。「投票箱」の歌のような幅広い読み手を唸らせる表現を増やしても良いか。野田鮎子「余白をもてあそぶ」

軽さのある歌いぶりに細かいディテールが非常に良い。意味が取り切れない部分があった。葉月まこ「アマリリス」、一首の完成度が高い。友人の訃報が歌われるが、関係がもつとはつきりしていても良いか。体言止めの多さが少し気になった。長雄誠一郎「定時制高校」、定時制高校の教師。過去なのか現在なのか混乱する部分があった。歌われる場面、ディテールは非常に良い。古谷明希歩「横顔」、青春詠の良さが光る。場面の切り取りや勢いに優れたものがある。ややありきたりな言葉が磨かれると抜群に良くなりそう。藤真那智（無題）、動物満載で好きな連作。動物にも自身の周りにもさらに細かなディテールに期待。黒乃響子「龍山寺の空、旅と父の訃報」。主体と兄や父との関係性がうかがえる歌が良かった。表現はもう少し踏み込みみたかったか。伊藤真紀「インサイド・アウト」。やや抽象的な歌が多かった。リアリティのある具体物で読み手の映像を立ち上げる表現があるが一気に変わりそう。

## 連作の醍醐味 ● 清水あかね

力作ぞろいの四五編。絞り込むのが難しかった。三人の選者の評価軸には違いがあり、選ぶ作品は分散したが、初めから評価が重なり頭一つ抜けていたのが受賞作・森山なつめ「まろやかに融ける」だった。

・胃のなかのカレーがこねれてきたところに不妊治療のはなし切り出す

右の歌から始まるように連作のテーマは自身の不妊治療だ。まずテーマの出し方が明快。読者に歌の読みのヒントを与える。

・駅なかの花屋で買ひし芍薬の二本咲かずにしんと終はりぬ

・幼子がママへと駆ける道すぢにシロツメクサのほつぽつと咲く

歌は粒ぞろいだったが、右の二首は特に心に残った。不妊治療というテーマを踏まえて読むと、一首の味わいがぐつと深まる。咲かずに終わった芍薬は子を授からない切なさ暗示するし、「シロツメクサのほつぽつと咲く」という表現も空しさを感じさせる。連作の醍醐味だ。全体に感情を抑えた端正な詠みぶりにも心惹かれた。

そして、この森山作品の魅力に対して、

警笛を鳴らすように浮上してきたのが次席となった雨雨雨汰「話せたならば」。一読したのでは意味が分からなかった。しかし、何度も読むうちに老人施設ではなく障がい者施設のことを職員立場で詠んだ連作だと気づく。そこから全体像がつかめ、一首一首が立体的に浮かび上がってきた。

・ああ、彼は独りぼっちで三度目の警報ベルを夜更けに鳴らす

・棚にある喀痰吸引人形に明かりを消して good night と言え

・アルビノの肌を持ちたる満月が灯りの消えたわが家を照らす

作者独自の表現世界が広がることが得難い。もう一步読者に親切になり、最後まで失速しないで歌い切れたら良かった。

・選者賞は古谷明希歩「横顔」に迷わず決めた。瑞々しく、しかも一首一首が上手い。作中主体はおそらく高校生。友達以上恋人未満の相手に、他に好きな人ができたとと言われてしまった設定の連作である。

・「好きな人できた」とあなたに告げられて自転車置き場のくちなし落ちる

・胸元にとまる蝶々をくずしました蘇らせる  
白い指先

・ところと産毛ひからせ五限目のあなたは波にさらわれてゆく

「あなた」は異性とも同性とも読める。赤毛のアンが腹心の友ダイアナの恋を知り、心を揺らす場面も思い出した。

その他、細部の表現が魅力的な水野作、学習支援教室の臨場感が面白い守乃作、丁寧に乳牛飼いの日常と自然を詠んだ吉田作、水商売の母をリアルかつ詩的に歌った坊作、大人の淡い恋を描いた清水作、定時制高校の事実が胸を打つ長尾作を特に評価した。

・廃番のノリタケ小花碗皿に小さく止まる冬の陽光

・てにをはをてにはをと言う七歳の毛子  
墨君<sup>ハチキ</sup> 守乃みさと

・どこまでも黒くはるかに続く畑 乳牛飼いの春のはじまり 吉田まゆみ

・終着の駅のホームに甦る記憶のすみにハニミヨウが飛ぶ 坊 真由美

・はつなつの朝の電車にうつむいて春の余韻としてのうたた寝 清水 晴架

・卒業生一人ひとりの名を呼ぶ間に辞めた生徒の名も黙読す 長尾誠一郎

選を終え、一首の表現の魅力と連作としての一貫性の両方が大切だと実感した。



## 選考基準について ● 服部崇

群黎賞応募作品四十五編を読むに当たって、自分なりの選考基準を考えてみた。①テーマは明確か(テーマの明確性)、②連作の構成はしっかりしているか(構成の巧拙)、③抜きん出た歌はあるか(秀歌の有無)、④訴えてくるものがあるか(作品の訴求力)、⑤選者の好みに合うか(嗜好との合致度)の五つの項目について五段階の評価点をつけ、合計点の多い順に上位から五作品ごとに三点、二点、一点の作品とする。こうした基準に基づき選定を行った結果を持って第一次選考会に臨んだ。また、最終選考会では推したい作品を推した。

第九回群黎賞は森山なつめ「まろやかに融ける」に決まった。不妊治療に取り組む女性を主体に据えた作品で高い評価を集めた。

- ・木漏れ日のしたぶち猫が歩きけりだまし
- ・絵めきて午後はすぎゆく

次席には雨雨雨汰「話せたならば」を選んだ。癖のある言葉遣いで独特な雰囲気を出し出す歌群を生み出している。独自路線を更に突き進んでほしい。

・此処がまだ終の棲家と思えずに「ウチニ

カエル」と繰り返す人

選者賞には藤真那智(「無題」)を選んだ。

動物と自身との歌によるコラボレーションが魅力的だった。作品中にはイルカ、チンパンジー、カニ、ペンギン、ラッコ、パンダが登場する。動物が登場するだけでは仕方がないのだが、動物を登場させることを通じて自身の感じている苦みを読者に伝える。動物が登場しない日常の歌も魅力的だった。

- ・イルカにもジャンプ苦手なやつはいる
- ・バックヤードで胃薬を飲む

・合コンの話題には向いてないだろうカニに胆のうがあるのかどうか

野田鮎子「余白をもてあそぶ」は詩を書く君との関係を甘く詠った作品。相間の香りがする一連に惹かれた。

- ・100均のフィルム重ねると色は濃くなるやさしい色だね

南ゆき「森をたずねよ」は暖簾街を森に喩える試みが成功している。飲み屋の女将が自らも近隣の店々を飲み歩いていて雰囲気引き込まれる。

- ・ターさんの本名知らず二十年訃報にて知る高井氏八二歳

坊真由美「白いコスモス」は八幡駅近くのスナックで働いていた母や当時を想い出しながら詠んだ作品。場末感が漂っている。

- ・終着の駅のホームに甦る記憶のすみにハニミョウが飛ぶ

黒乃響子「龍山寺の空」は娘と台湾に旅行に向かう機内で父の他界を知る。帰国便の変更が困難であったことは想像できる。

- ・遺影には兄の選んだ父が居てこんな顔して笑うんだって

穂山順子「月の角度で」はリストカットする生徒を抱えた教師の作品。生徒との距離感に悩む教師像が描かれている。

- ・黒板のチョークボックス拭き終えて何もなかったような教室

そのほか、内山奈津子、古谷明希歩、藤しおり、口笛浦、和音ひなたの作品にも注目した。

冒頭に書いた自らの選考基準については、偏っている、改善の余地がある、と感じるところもあった。他方、今回の選考の結果については、揺るがないようにも感じている。いずれにせよ、各自が各様の選考基準を設けることで良いものと考えている。